

はじめに

マイナポータルにおける特定健診情報の閲覧が現実化する中、個人および集団の健康情報の利活用法の整備と実装は喫緊の課題である。健康医療デジタルトランスフォーメーションが急速な勢いで進み、Personal Health Records に代表される個人の危険因子の経年推移・変動の情報を、公益性の観点から有効利用するためのスキームの模索が始まっている。一方で循環器疾患のリスク因子評価の分野に目を向けると、血圧や血圧検査値等の経年的な推移・変動の疾患発症・死亡への影響の研究が進められていることから、公衆衛生を視野にいった経時健診データの利活用法の開発に期待が寄せられている。

本研究は厚労科学研究として構築された EPOCH-JAPAN(Evidence for Cardiovascular Prevention From Observational Cohorts in Japan)データベースを発展・拡充させて、日本人集団における科学的根拠に基づいたリスク評価や行動変容を効果的に促すツールの開発と実装を目指すものである。EPOCH-JAPAN は対面調査による精度の高い測定値、カルテ調査等に基づく正確なエンドポイント、長期間の高追跡率などの条件を満たした、質の高い 17 コホートのデータ統合によるデータベース（約 20 万人、15 年以上の追跡）研究である。本研究では EPOCH-JAPAN 研究グループの中から、経年的な危険因子の推移・変動の影響が検討できるコホートからデータ提供を受け、経時データの統合データベースを新たに作成・解析することを目的としている。国家レベルのエビデンス創出をしてきた EPOCH-JAPAN の統合データベースは国民を念頭においたものであり、現下の課題である Personal Health Records の利活用、さらには今後の NDB の解析方法に科学的なエビデンスを提供できる本研究課題は極めて重要といえる。

アジア・太平洋地域における最大規模の循環器コホートデータベースをさらに発展させ、を利用し、国内外の著名学術雑誌に発表された本研究班のエビデンスは、日本人集団における貴重な研究成果であり、わが国の知的財産といえる。この大規模データベースを用い、日本を代表する疫学研究を牽引する諸学者により展開される本研究成果をもとに、わが国において更なるエビデンス構築が行われることを期待する。

研究代表者

東邦大学医学部社会医学講座医療統計学分野教授 村上 義孝

令和 6 年 3 月 31 日